

交通・通信

交通

江戸時代においては、関所の通行手形がないと旅行することができなかつた。一宮から江戸へ行くにも、市川の関所で示す通行手形が必要であつた。乗物としてあつたのは馬かカゴで、それを利用してきないものはわらじを履いて歩くよりしかたなかつた。歩くだけの旅行が、どんなに苦しいかはおよその想像がつこう。

江戸時代に一宮の人が最も多く往き来したのは、なんといつても江戸である。江戸時代以前のことはここで明らかにし得ないが、その江戸との往復はどんな状態であつたか調べてみると、現在東京へ自動車で行く場合、茂原、長柄、潤井戸、千葉、市川を経て行くものと、本納、土気、千葉、市川を経て行くものとあるように、昔もこの道を通つたのではないかと思われる。

加納藩の文書を見ると、江戸から一宮に来る道は、千住、小金、

と、東京を午後出発して行徳で一泊、翌日船で江戸川を上って市川で人力車を雇い、船橋まできて昼食、それから馬に乗り替えて、千葉で一泊、翌朝出発して潤井戸經由六地藏で昼食、馬を替えて夕刻一宮に着いたと書かれている。

この不便な状態から早く抜け出そうとして、明治十七年(一八八四年)頃から県内各地に馬車鉄道を敷設しようという計画がたてられたが、なかなか涉らず、明治二十七年(一八九四年)七月市川、佐倉間に、県内ではじめて鉄道が開通、その年の暮れ、市川、本所間が開通した。千葉から一宮に至る鉄道は、房総鉄道会社が敷設したものであるが、これが敷設されるまでの経過をみると、明治二十年(一八八七年)東京本所中二郷瓦町の大田実等の発起で房総馬車鉄道株式会社が設立され、蘇我、茂原間の馬車鉄道を敷設する認可を申請した。その後社名を房総鉄道会社と改め、馬車鉄道に変更、更に普通鉄道に変更の認可を受けて工事に着手した。この房総鉄道会社の計画に対し、総武鉄道会社は、浜野、潤井戸、長柄、茂原、一宮を結ぶ鉄道敷設の認可を申請した。これに対して一宮、茂原その他、この沿線となる地域の有志から請願がなされたが、この請願は受入れられず、房総鉄道の蘇我、大網間が明治二十九年一月開通、続いて蘇我、千葉間が一カ月後に開通し、これで大網、本所間の鉄道が全通したのである。このため、今まで浜野から汽船で東京へ出た人々は、大網から汽車を利用することとなった。大網、一宮間の鉄道敷設工事が完了し、一宮駅が営業を開始したのは明治三十年四月十七日のことである。当時、一宮から本所まで五時間かかったという

我孫子(一泊)、安食、成田、滝新田(一泊)、土気、本納、一宮と三日がかりで来ている。これは、加納家の江戸屋敷が浅草にあつたことと、我孫子の近くの岩井村(現在沼南村)に領地があつた関係で、このような道を通つたのかもしれない。

文政十二年(一八二九年)江戸の画家、春木南湖が一宮へ遊びに来た帰り道、長柄、潤井戸を通つて帰ろうとしたら、あの道は野馬がでて危険だからよした方がよい、と注意されたことが、船橋図書館蔵の絵日記に書かれてある。これからみると、土気經由が主な道であつたのかもしれない。

ところが、明治二年に関所が廃止され、どこでも自由に旅行ができるようになる、おのずから交通路も変つてきた。浜野(現市原市)から東京の霊岸島まで汽船が通うようになって、長柄、潤井戸經由の道が専ら利用されるようになったのである。この方法で東京へ往復した人の話を聞くと、朝の三時に一宮を出て、六地藏(長柄町)で小憩、十一時頃浜野着、それから汽船に乗り、霊岸島に着くのは夜の七時か八時頃になるので附近の宿屋に一泊し、翌日東京へ入つたということである。また乗物を往復した人の旅日記をみる

ことだが、歩いて二日半もかかったことを併せ考えると、郷土の人たちが歓喜躍動したというのも当然であろう。

その後続々と県内に鉄道が敷設され、大正十二年から小型の客車がボギー車に代り、昭和二十七年八月からはディーゼルカーが運転されるようになり、昭和三十三年十一月十日からは、都心より千葉県乗り入れの便を図るため準急列車の運転がなされるようになった。このため両国、一宮間は僅か一時間半で来られるようになり、往時を振返つてみて、正に隔世の感を持たざるを得ない。

なお、現在一宮駅を起点としているバス路線は次のとおりである。
一宮駅—海岸 一宮駅—太東駅 一宮駅—茂原
一宮駅—国吉、大東 一宮駅—大多喜 一宮駅—小泉、茂原
通過する路線としては、長者町、茂原間がある。いずれは小湊バスが運営にあつてゐる。(写真は本文四九七頁参照)

最近における一宮駅旅客乗降利用状況表

項目	乗降客構成		乗降客の普通、定期別	
	乗車	降車	普通	定期
総一宮	51.4%	48.6%	24.5%	75.5%

種別	乗車人員		降車人員	
	定期	一般	定期	一般
昭33年度	682,735	282,552	682,735	280,038
昭34年度	743,301	287,513	743,301	285,932
昭35年度	765,823	284,343	765,823	277,138
昭36年度	816,684	265,635	816,684	260,435
昭37年度	877,727	267,278	877,727	264,148

一般旅客に比べて、定期券利用者の増加が目立って多い。この理由の一つは勿論、人口の都市集中の傾向によるものであるが、本町の産業構造が原始産業である農業に依存する面が強く、町内に工場らしきものがないため茂原、千葉、都内にと通勤者の増加によるものである。

歴代駅長一覽

上総一ノ宮駅

東浪見駅

氏名	福岡 謙治	明40・9・1	氏名	村田 淨磨	開業大正十四年十二月十五日
着任	佐羽内又吉		武井 省三		
転任	本橋 嶋次		関 得三		
退任	藤原 真雄		石森 房市		
	清水 巖市		伊藤不美男		
	大石 万作	昭3・12・10	大久保 清次郎		
	佐久間治秀	昭3・12・10	島田 武		
	島田 万蔵	昭8・7・29	古宮 重吉		
	石塚 敏	昭11・3・18	桜井貞二郎		
	釈尾 秀一	昭15・2・12	北見辰四郎		
	長尾 勇吉	昭16・3・11	元木喜之助		
	滝本 愛次	昭19・1・20	山田 武夫		
	高橋 光	昭21・2・13	宇佐美文寿		
	工藤 文次	昭24・3・26	鎗岡 修三		
	小関 新一	昭27・2・20	塚越 舟蔵		
	印南 昌訓	昭30・3・10			
	吉永 秀雄	昭32・2・18			
	萱野 主税	昭34・2・11			
	矢口 三男	昭36・2・13			
	矢野 高	昭38・2・8			
		現在に至る			

通信

郵便 人々が生活していく上には、お互いにことを知らせあういわゆる通信が必要欠く可らざるものである。オリンピックの競技種目であるマラソンは、通信機関のない昔、戦勝を本国に知らせるため伝令を走らせた故事にならって行なわれた。昔の通信は、このように人を走らせるか、早馬を飛ばすか、さもなかったら火や煙や、鐘のような物で知らせるよりほかに方法がなかった。世の中が進歩するに従って通信の必要度が加わってくるのは当然で、わが国では、大化の改新によって手紙のやりとりが、確實迅速にできるよう「駅」の制度を定めた。しかし、これは公用の手紙に限られ、一般人は利用することができなかった。一般人は特使をたてるか、自身出向くかするよりほかに方法はなかったものと思われる。現在でも隣組内に不幸があると、「告げ人」が出されるのも、このように通信の方法のなかった時代の遺物である。

徳川時代の寛文四年（一六六四年）「定六」とよばれる町飛脚が出現し、一般の人の手紙を送達することになった。しかし、それも江戸（東京）と大阪の間に限られ、月に三回往復するにすぎなかった。そしてその手紙は、受取人に配達するのではなく、飛脚の宿の前に箆を敷き、その上に手紙を並べておくのである。すると、人々が

上総一宮駅旅客一覽表（自大正9年度至昭和38年度）

年度	乗車人員 人	降車人員 人	送		着		旅客収入 円	事
			手荷物 個	小荷物 個	手荷物 個	小荷物 個		
大正 9年度	135,678	134,363	6,387	10,177	5,083	10,891	28,852.85	
" 10年度	159,537	159,054	6,535	8,441	5,529	10,071	68,704.06	
昭和 2年度	214,237	212,459	4,641	8,423	4,806	8,423	73,380.94	
" 6年度	198,811	199,234	4,867	7,857	4,875	8,846	70,638.99	
" 7年度	180,402	181,313	4,867	6,559	5,039	7,506	63,895.40	
" 8年度	145,531	147,527	5,378	5,851	5,172	6,855	61,601.73	
" 9年度	186,589	187,822	6,598	5,973	5,517	7,262	71,057.32	
" 10年度	191,968	191,515	7,130	6,007	6,079	6,060	71,057.32	
" 11年度	195,386	194,314	7,716	5,988	6,215	6,352	7,607.58	
" 12年度	191,532	192,848	8,861	6,486	7,021	6,730	76,691.71	
" 14年度	252,337	251,607	10,196	7,329	73,29	6,967	9,160.939	
" 25年度	582,561	572,363	1,163	5,244	1,406	5,691	14,969.630	
" 26年度	642,373	641,338	1,002	6,570	1,536	7,360	17,245.594	
" 27年度	702,613	695,167	1,087	2,895	1,637	5,259	19,689.412	
" 28年度	746,572	743,524	1,120	2,416	1,560	3,821	23,278.143	
" 29年度	758,487	754,658	1,151	1,840	1,510	3,883	25,911.236	
" 30年度	807,169	802,598	1,048	2,020	1,267	3,314	27,844.589	
" 33年度	948.833	946.251						
" 36年度	1,050,166	1,042,961	750	710	612	5,755	37,904.245	
" 38年度	1,145,005	1,141,875	539	8,713	549	7,861	49,891.692	

集ってきて自分宛のものがあれば、受取っていくという呑気なものであった。手紙を差出す場合、東京では、日本橋の橋の上に飛脚屋の吠がいてあって、それに手紙と料金を入れておくと、夕方飛脚が来て取集めて行ったのである。この手紙は、一句一回大阪へ送られる。東京、大阪間が六日かかったというから、大阪に着いて受取人の手に渡るのは、それから何日かかることか、受取人が来なければ、いつまでも箆の上に並べられていたことであろう。

このように江戸と大阪間だけであった飛脚制度も、寛延の頃から全国各地に拡がっていった。一宮にこの飛脚屋ができたのは、次のとおり戌六月となっている。この戌年は、寛延以後では宝暦四、明和三、安永七、寛政二年がそれに当たり、それ以後も十二年毎に廻ってくるのでいつの戌年かはっきりしないが、この商売に対して村役人が保証の上で広告をしているのが面白い。

戌六月一ノ宮町江常飛脚宿極 此觸頼状左之通 然者此度当所書面之者共、其村々江表御用之筋、上納金并御百姓中商人中江戸登セ金、為替取組、其外荷物飛脚請負いたし廣益相成候様出精仕、賃限ヲ以助成渡世致度願出候ニ付右之もの共所持之地面書入為替金取組引請証文為相認、拙者共請取置申候、御用向御座候節者、無御心置、為替金銀御取組被下度候、万一道中間違之義も有之節者、拙者共急度取立、少も金主荷主衆中江御損毛相掛申間敷候、委細之義ハ此者共口上を以可願上候間、宜敷御承知被下度奉願入候 以上

一ノ宮本郷村

下雇願主

右之者共各様方江願上申度候ニ付添書を以乍略義申上候
 一ノ宮本郷村役人⑩
 藤重郎⑩
 藤八⑩
 鶴助⑩
 清六⑩

飛脚會所仕方書
 一御村方御用一度往來之賃錢 銀五匁
 金拾兩ニ付 同者匁五分
 一荷物者目ニ付 七拾式文
 一紙包ものハ 見斗
 一壹駄荷物 但し陸廻し 壹メ五百文
 一同断 舟廻し運賃駄賃外齊領賃 八十文
 一御百姓方書状巻封 三拾式文
 一金壹兩ニ付 銀四分
 一商人方書状巻封 十八文
 金子拾兩ニ付 銀壹匁五分
 右之通御座候 尤一ヶ月六齊出日
 二日、六日、十六日、廿一日、廿六日
 飛脚會所 小網町三丁目
 あふみや喜兵衛

ものが割安なのはどうか、これは送達の方法に違いがあったのかも知れない。郵便の父といわれる前島密駅通頭の回顧録の中に、「自分が茨城県の那珂湊へ急ぎの手紙を出そうと、江戸の飛脚問屋へ頼みに行ったところ、江戸から水戸までは飛脚の便があるがそれから先は、何日かかるか分らないと云うので、急ぎの手紙だから己むを得ず、貳兩の賃金を払って人を雇い、那珂湊まで持たせてやった。」ということがある。それが、明治の初めのことである。貳兩といえば当時は大変な金額で、一通の手紙にこんな大金をかけなければならなかったのである。そこで前島氏は、外国の郵便制度を研究して、明治四年三月新しい郵便の制度を創設したのである。そのため、当時東京から大阪まで手紙一通送るのに二十一兩二分かかったものが、国营の郵便役所（当時は駅通局といった）でやるようになってから、僅か一貫五百文で用が足りるようになったのだから、人々が驚いたのも無理のないことである。
 明治政府は、郵便制度に限らずあらゆるものを、諸外国にならって改革したので、国費を多額に使わなければならなかった。
 かかる折柄、全国いっせいに郵便局を設置することは、その財政上困難であった。しかし、全国に郵便局がなければ完全な通信業務は行なわれないので、主要都市の郵便局は直接国家が建設し、その他の地方は、その土地の有力者を官吏に任用し、そのものに局舎、器具等を提供させて協力させたのである。これが成功して、日本郵便制度は数年にして確立した。
 東京、横浜間に日本最初の電信線が開通したのは、安政元年（一

八五四年）アメリカのペリー提督がモールの発明した電信機を幕府に寄贈してから、十五年目にあたっての。その後、各地に電信線は架設されたが、これを全国津々浦々に及ぼすことは容易でなかった。
 一宮に電信線が架設されたのは、明治三十年で、電話は、それより十二年後の明治四十二年であった。一宮郵便局が電話交換業務を開始したのは、県内では千葉、銚子、木更津に次ぎ、四番目といわれている。

一宮郵便局

開設年月日 明治六年一月一日
 電信業務開始 同 三十年三月十六日

郵便切手類収入印紙売捌所 一二個所
 各種事務取扱の概況

年度	種別		小包郵便物		電報		電話		為替		貯蓄		年金恩給		簡易生命保険		
	引受	配達	引受	配達	発信	着信	加入者数	発信通話数	振出	払渡	預入	払戻	受給者数	支給額	加入者数	保険料	
大正三年	四、四三三	四、八六六	二、九七五	三、三二九	三、六三六	三、〇〇三	三、八三三	三、八三三	一〇、四六九	七、七五九	七、七五九	一〇、二六九	二、三六三	二、三六三	七、七六	三、〇三三	八、八三三
昭和二年	三、三〇二	四、八七五	四、〇九二	三、九六九	七、四四四	二、一〇、〇一〇	五、〇〇〇	八、〇〇〇	二、四、〇〇〇	一、七、八三三	一、〇、〇〇〇	一、九、八〇〇	二、九	四、一八二	一、七、〇〇〇	一、六、四三三	三、三三六
七年	三、三三三	三、七三三	四、〇〇〇	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
一二年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
一七年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
二七年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
三二年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三
三七年	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三

歴代郵便局長一覧		開設 明治六年一月一日	
氏名	就任年月	退官年月	
中村伝次郎	明治六年一月	明治二十六年二月	
高梨 長助	明治二十六年二月	大正元年十月	
中村祐吉郎	大正元年十月	昭和十七年一月	
中村 正紀	昭和十七年一月		

ラジオ 大正十四年、芝愛宕山の仮放送局で放送を始めた頃は、学生が自身組立てた受信機を用いる、鉱石式受信機で聞くくらいで、大勢の人が聞かれるラッパをつけた受信機が入って来たのは、暫くたってからのことであった。

一宮町では、中村薬局、三芳堂、角直呉服店等がラッパ付の受信機を施設して放送を聞くようになった。当時は未だ珍しかったので、それぞれ店の前に大勢の人々が集まり耳を傾けて聞き入っていた程であった。

この受信機は、バッテリー一個と、四十五ボルトの乾電池二個を電源として使用するため、経費が高み、バッテリーは、時々充電しなければならぬ不便なもので、その上高価であったので中々普及しなかった。昭和三年頃になって電灯線に接続する交流式の受信機ができ、五十円（当時米一俵八円程度）くらいで買えるようになってきたが、未だ贅沢品の域を脱しなかった。この頃一宮町の中の原のおばあさんが、上野の動物園に行ってラジオを見てくるんだ、と聞いたそうだが、それこそ「お早よう」から天気予報までする声を

昭和三十一年日本テレビが、玉前神社の秋祭りをテレビで放送したことがある。この頃でも町内のテレビは数台しかなかったため、施設してある家庭にお願いし、大勢の人達の見える場所へ機械を持ち出して貰ったものである。

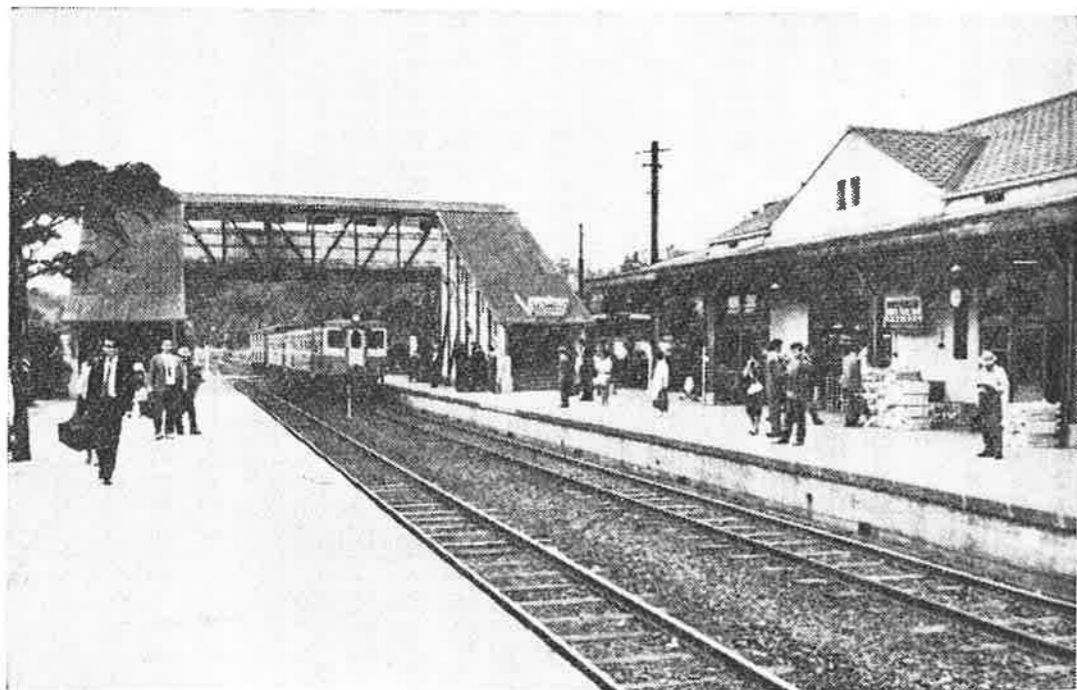
それが昭和三十三年頃になると、機械も一時より安価になり（一四吋六万円程度）、皇太子の御成婚式が契機となったりして、普及率は急激に向上した。

テレビ普及戸数	
昭和28年度	1
" 29 "	6
" 30 "	14
" 31 "	31
" 32 "	67
" 33 "	156
" 34 "	376
" 35 "	733
" 36 "	1,297
" 37 "	1,614

有線放送 一宮町の有線放送は、郡内陸沢村、長南町に次いで、同三十四年一月三十一日に施設し、ただちに放送を開始した。当時の加入数は千五十戸で、同三十八年八月一日現在千二百三十六戸に達し、全戸数の五十五パーセントをしめている。

放送時間を夏季（四月～九月）と冬季（十月～三月）にわかち、夏季は午前六時三十分から午後八時三十分まで、冬季は午前七時から午後八時まで放送している。

一戸一ヵ月の通話使用料は、開設当時百五十円であったが、後に百八十円にあらためた。



上総一宮駅全景

聞いては、何かの動物と間違えても当時としては当然だったかもしれない。

昭和六年満洲事変が勃発して、日本軍の奮戦のニュースが多くなるにつれ、ラジオの聴取者も増え、日華事変から太平洋戦争と戦線の拡大にもない、出征兵士の数も増し、また出征軍人の家族は、聴取料免除の特典もあって普及率は急激に伸びたのである。

終戦後、放送の民主化が指令されるまでは、ラジオの放送は日本放送協会が独占で行っていたのであるが、その後民間放送の出現によって、放送内容も一変した。

そして、受信機も軽便なトランジスタが発明されるに及び、ラジオの施設は殆んど各戸になされた。

ラジオ普及戸数	
昭和19年度	700余
" 28年 "	1,375
" 29 "	1,425
" 30 "	1,439
" 31 "	1,550
" 32 "	1,514
" 33 "	1,725
" 34 "	1,580
" 35 "	1,162
" 36 "	714
" 37 "	300

テレビ テレビは昭和二十八年から放送が開始されたが、機械が高価で一台中万円からしていたので、なかなか各家庭には入らなかった。一宮町で最初に施設したのは、角直呉服店で、同店でテレビをかけていると、いつの間にか店の前に黒山のような人だかりができた。整理がつかなくなって店の戸を閉めると、憤懣やる方ない人たちが戸を叩いたり、蹴とばしたりしている姿がよく見受けられた。

団 体

一宮地区

婦人会 一宮婦人会は、明治四十三年二月十一日、当町玉蔵寺に於て発会式が取り行なわれ、告森良知事、渡辺勤郡長、地元飯塚捻十郎町長等の有志来賓を迎え、加納子爵夫人鑑子を会長に、一宮裁判所判事夫人落合そよ子を副会長に、十名の常任委員を以て組織された。町内家庭婦人の親交と、郷土の発展を目的とする処女会も合わせ設け、会員の子女には裁縫、手芸、料理等を講習会を通じて教え、講演会、視察旅行なども年中行事として行なった。秋には、農村部は穀類・野菜等、町内は手芸品を各会員から出品して「バザー」を開き、その売上金を会の運営費にあてる等、着実に地歩を固めていった。このほか、高令者の尚風会員男女あわせて二百余名を招待し、役場吏員と共にごやかな会を催し、尚令の文字を入れた白扇を記念に贈る等の例を作った。明治三十三年一月北清事変起り、奥村五

百子代は現地北清を慰問視察した結果、戦争による遺族の救護事業として戦死者、及び準戦死者遺族の救済はもとより、負傷により廃人に属する者を救う事を目的とした組織を結成、名付けて愛国婦人会と呼び、全国に会員を募った。当町婦人会の中にも愛国婦人会員は数多くいた。一宮婦人会は、初代会長加納鑑子夫人が、昭和十六年四月八日解散に至るまで唯一人会長として通され、その間、副会長には二代田中はな、三代浅野きよ、四代福島はつ等が夫々就任した。常任委員は、田中はな、福島はつ、浅野きよ、齊藤とみ、齊藤ふじ、宮野はなの、飯塚千代ち、秦きく、高原むめ、長谷川とく等が夫々に当たり、講演会、視察旅行、バザー等を年中行事として行ない、大正七、八年頃は会の最も盛んな時期であった。

大正八年五月、静岡県に石垣いちご栽培視察を行なった。昭和七年、突如起った満洲事変に全国の婦人はみな立ち上り、国防婦人会員として悉く参加した。同十年四月、日本国防婦人会長武藤能婦子、大日本国防婦人会東京師管本部荒木錦子、大日本国防婦人会千葉地方本部長藤原銀子等の指導のもとに、一宮町分会は分会長に関あき、副会長に中村末吉(小学校長)、書記に清水典、中村ふみ、會計

と殆んど我が家を顧る暇もない有様であった。このような状態は終戦の詔勅が下るまで続けられ、日本敗戦など夢にも思わぬ会員は、精魂を傾けてその責任を遂行した。しかし、終戦と共に婦人も解散の止むなきに至った。

に中村はる等を選び、各区理事十六名の組織を以て一斉に立ち上った。会費は一ヵ月一銭、年間十二銭、白エプロン襦袢も甲斐々々しく留守家族の慰問、出征兵士の歓送などを行ない、会員より寄付を募り、昭和十二年頃には慰問袋の作成、報国貯金の協力にも全力を傾けた。また梅干をはじめとして、蚊張のつり手から足袋の小はぜまで供出、塗装用には煙突の煤、かまどの灰までも供出した。

昭和二十一年他町村にさががけ、再び結集し、一宮町婦人会の名称のもと清水典を会長に、大場こと、鶴岡起美、湯池普美を夫々副会長に発足したのである。会則の作成、その他新生日本の婦人会誕生のためにつくした清水会長の努力は、全会員の等しく認める処であった。

武運長久を祈願する十二社参りも、この頃盛んに行なわれた。同十三年十月二十七日午後五時三十分漢口陥落による旗行列に参加、同年十一月、長生郡の戦死者遺族慰安会を開催、同十四年三月十日郡第五回総会に出席等々、銃後の奉公は日と共に多忙となった。同年七月二十四日より防空訓練が始まり、会員は全員モンペに防空頭巾姿となり、バケツリレーによる防火訓練に明け暮れ、意気は益々盛んであった。関あきは、終始熱と愛を傾けて会務に尽され、屢々、表彰状並びに感謝状を受けられた。同十七年二月一日、高度国防国家体制化に入り、名も大日本婦人会と改め、明治三十三年以来長い歴史をもった三大婦人団体もここに一本化され、全国会長に山内楨子が就任、一宮町支部長には、高梨はまが委嘱され、福岡あき子、清水典、関千佐の各氏が夫々副会長に推された。

婦人会の活動は時代と共に歩みを進め、終戦直後物資の乏しい折柄、荒地開墾野菜の分配などで各家庭を喜ばせた事も組織の力を知らしめた一つの例である。二十一年四月十日、婦人に参政権があたえられ、宮原地区在住の竹内歌子が衆議員議員として当選したことは、婦人会員の自覚を一層深めたものである。同二十三年、沢地こととが会長を引継がれたころ、平和日本の落着きも幾分みられ、町観光協会が行なった花火大会の灯籠流しには、婦人会の手による物が数多くあり、戦前戦後を通じて最も華かな夜景を呈したのである。

翌二十四年五月十四日、長生郡連合婦人会創立に当り、一宮町婦人会は、郡連合婦人会に加入した。同年役員改選により大場ことが会長に就任、適切な指導のもと会員の融和を図る一方、町政にも協力、白鳥省吾作詞、寺部頼幸作曲、唄日本橋きみ栄、伴奏ポリドル管絃楽団、藤間玉花振付の一宮音頭を制定、玉前神社境内での盆踊りにこれを公開する等、自由民主国家誕生五年の姿は、婦人会活動

かくして遂に太平洋戦争へと突入、一握りの小布類まで家庭から回収して防空監視所の布団作り、兵隊の衣類の補綴、海岸地帯の開墾による増産への協力、海水よりの塩採り作業、砂鉄採りの奉仕、一家の働き手を戦地に送った農家や、戦死者の家庭の手伝い、共同炊事の奉仕作業、ある者は託児所に幼児を預り、日没までの奉仕に

の上にも反映して、町も次第に明るさを増してきた。

一宮音頭

1 ハー、海に朝日よ、お宮に橋よ

寄せる白波、花と咲くく

ホンニ平和な一宮 ホイ

2 ハー、浜は九十九里、みこしが揃うた

裸祭りに、気も揃うたく

ホンニ平和な一宮 ホイ

3 ハー、川に灯籠、空に 花火

海もまじかの橋の上く

ホンニ平和な一宮 ホイ

4 ハー、年の初めは、金比羅様よ

春は経堂まつりからく

ホンニ平和な一宮 ホイ

一宮音頭 作詞 吾省 鳥部 白寺 作曲

うみにあさー ひー よ おみ
うみにあさー ひー よ おみ
うみにあさー ひー よ おみ
うみにあさー ひー よ おみ

なお、義務教育六三制実施による新制中学校建築にも協力、桜の苗木千本を婦人会の手で植樹、いまは校庭に風致を添えている。昭和二十七年、会を斉藤信が引継ぎ、この年から農協婦人部の部長を兼務することになった。物資の出回るにつれ、町の中も次第に派手好みの傾向をみせてきたので、農協とタイアップして生活改善の立場から町と農村の別なく、共にわが子の成長を祝い合う意味で、七ツ子の合同祝いを実施することに踏切り、以来今日までこの行事は続いている。また、同年八月初旬の農閑期を利用して（以後毎年例となる）、母親学級を開設、青少年の心理、純潔教育、新しい法律等々全会員が学級員として勉強するよう、年間六十円の会費の中から二十円を地区の母親学級に還元した。各地区に於ては、青年クラブの若人達と座談会を催し、結婚と恋愛について、親の立場、子の立場についての話し合い等をたびたび行なった。その他政治意識を深めるために町議会の傍聴、裁判公判の傍聴、奥むめお女史を招いての講演会の開催、婦人会報の発行等により会員意識の徹底をはかっ

た。十月五日、地方教育委員公選が行なわれ、小学校PTA推薦による中前歌子と共に斉藤信も候補に立ち、組織の力をいかに発揮して両名共見事に当選した。当時会員の踊りは益々堂に入り、殊に下部落は一宮駅ブリッチ落成祝い、海水浴場開き、盆踊り等、機会ある毎に参加して日頃の技倆を披露した。また町民体育大会の婦人会の踊りは、各部落繰出で行なわれ、なごやかな中にも益々会員相互の和を深めるのに大きな役割をはたした。続いて二十九年、斉藤多可が会長に就任するや、益々盛んになった母親学級の要望に添うために町当局を動かし、会員も積極的に勤労奉仕に参加、現在の玉前神社裏にある遊園地ができ上がった。同じ頃、荒地船頭給の合併に伴い、会員数七百四十名が八百三十余名に急増し、コーラス団も生まれ、益々明るい婦人会になった。二年の任期後、昭和三十一年中村はるが会長を引継ぎ、母親学級は婦人学級に変わり、会員各自が更に意識を高めるため、読み、考え、話し、書く勉強にいそしみ、この間会員も八百八十名の多きに達した。昭和三十一年の伊勢湾台風被害地見舞と、三十一年の北九州水害地見舞のための金品集めも、会員役員の努力によって県下最高の成績をあげ、青少年健全育成にも力を入れたことにより、千葉県保護司会より表彰を受けた。婦人会月掛貯金農協婦人部貯金についても、千葉県貯蓄推進協議会より表彰状と見事な金庫の記念品を贈られた。昭和三十三年、鶴岡起美が会長に就任、益々婦人学級育成に意を注ぐ他、台風二十二号による静岡伊豆地方災害見舞金品集めにも協力、優秀な成果を挙げた。また少年鑑別所をはじめとして社会施設の見学、慰問等活発な社会

活動を通じ会員の意識向上のため鋭意努力を続けた。次いで近藤倫代が会長を引継ぎ、特に青少年健全育成に力を注ぐと同時に、政治意識の高揚をはかるため選挙投票日には、棄権防止伝達に努める他宣伝カーに同乗し、町民に棄権防止を訴える等協力した結果、男子の投票率上昇は勿論、婦人層も二割、地域によっては三割以上も上昇をみるに至った。この結果、千葉県公明選挙推進委員会より表彰状と金参千円の褒賞金を受けた。更に千葉県連合婦人会より委嘱された中央婦人学級に、東浪見地区のあづま会と共に参加した。特に青少年健全育成協議会の委員、栗原登支先生の学習は大きな成果を納めることができた。かくて歴代会長のもとには益々発展し、種々の活動を通じて組織も次第に強固なものとなった。しかし、行動が活発になるに従って会の運営資金もかさみ、資金づくりのために映画切符、物価販売等の仕事もやらなければならなかった。このため役員を忌避する者がふえ、三十七年伊藤喜代が会長に就任するに当って顧問、相談役が夫々相寄り、対策を講ずる一方、町当局にはかった結果、町長のはからいにより国民年金の集金を会の手任されることになり、年間八万七千円程度の収益をみるようになった。こうして苦しい時期を乗り切り、会本来の活動に専念できる道が開け、明るい見通しもついたのである。伊藤会長は先ず会員の要望に応え、新生活運動の一環として貸衣裳の設置を計画、貸出しを実施するや、この企画は会員はもとより他町村利用者からも好評をもって迎えられた。

また結核検診への多年にわたる協力が認められ、千葉県衛生民生

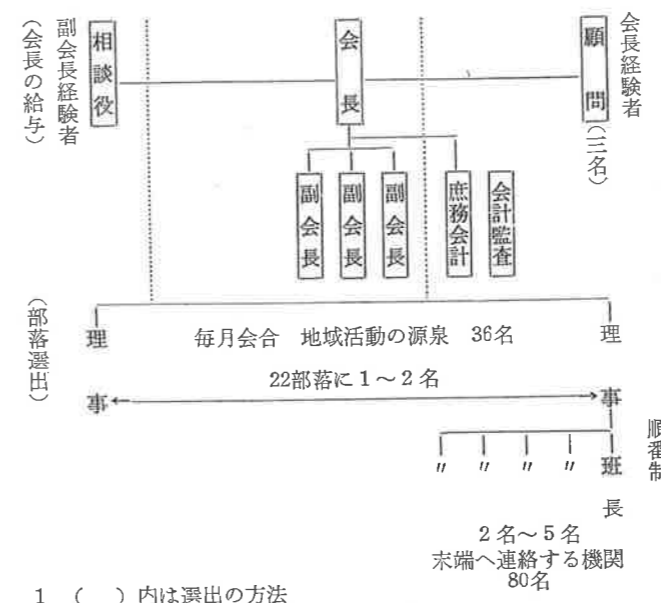
部より表彰状と記念品が贈られ、更に会報発行の運びとなり、料理教室の開設もなされ、三十八年度には東浪見あづま会について、文部省依嘱婦人学級に十一区より十四区までの会員四十五人が参加することになった。テーマは農村婦人として必要な教養を高めるため、次の三項であった。

- 1、土壌の調査
- 2、蔬菜の栽培方法
- 3、耕耘機の使い方

このようにしていまや一宮婦人会は、あらゆる活動を通じ、身近

一宮婦人会組織図

(理事会選出 総会承認)



- 1 () 内は選出の方法
- 2 副会長のうち1名は農協婦人部担当

郎三 藤近			
昭和卅一年	中村 はる	丸 とも	八八〇名
昭和卅二年	小高 とく	小安 文枝	五円
昭和卅三年	鶴岡 起美	丸 とも	八八〇名
昭和卅四年	丸 とも	小安 文枝	五円
昭和卅五年	近藤 倫代	丸 とも	八二七名
昭和卅六年	丸 とも	小安 文枝	五円
昭和卅七年	伊藤 喜代	丸 とも	八〇〇名
昭和卅八年	丸 とも	小安 文枝	五円

青年会 一宮町青年会は、明治四十一年一月二十五日、町内に住み義務教育を終えて家業につく、十五才より二十五才までの青少年を、将来実社会人としての苦難に耐えられるよう社会教育するを目的として発足した。旧藩主加納子爵の嗣子加納久朗を会長に、副会長齊藤一、幹事富塚市郎、原田吉郎、渋谷復二等によって組織された。

- 林業部 園芸部 畜産部 養魚部 兵事訓練部 柔道部
- 剣道部 商業部 簿記部 演説部

以上の各部を設けて、実習見学等を随時行なった。事務所は青年会、婦人会、農会の集会所として名を三會堂と呼び、観明寺裏の字矢倉前に設置した。この建物は後に移築され、農会として昭和八年まで使用された。後年、農協永年勤続の功により石井忠次氏宅となったのである。

園芸部の役員は次のとおりである。

な生活実態の中から得た貴重な経験の一つ一つを生かし、昨日よりは今日、今日よりは明日へと希望に満ちた毎日を送っているのである。

歴代会長、副会長

氏名	年 度	職 務	支 部	会 員 数	会 費
町長	昭和十一年	支部長	大日本国防		
助来藤齊	昭和十一年	副支部長	あさ	一六〇名	一カ月
三 脩 辺渡	昭和十七年	支部長	高梨 吉満	一六〇〇名	
中田 周	昭和廿一年	支部長	清水 典	五五〇名	五円
大 場 大	昭和廿四年	支部長	大場 六と	七〇〇名	五円
二 英 場大	昭和廿七年	支部長	渡辺 元代	七四〇名	五円
久我 我久	昭和廿九年	支部長	久我 初恵	八三五名	五円
我久 我久	昭和卅一年	支部長	我久 初恵		

顧問 小安留次郎
主任 富塚市郎 高師市蔵 中村仙蔵 森 要
なお園芸部には実習地として一町歩があった。梨、柿、枇杷、ブドウ、蜜柑等の果樹類七種、五百七十八本を始めとし、現在当町の年間米の産額五千万円をはるかに上廻る収益をみた。トマト、アスパラガス、セロリー等の洋野菜類も栽培研究された。この間静岡県興津農事試験場の視察も行なわれ、他町村よりの見学等もかなり多かった。

林業部は近藤純一、高原仁助等により松、杉その他を苗床に種より仕立て、当時町有地であった字豆戸を二十町歩五十年後の将来、伐木による収益の四分を町、六分を青年会で分配する期限貸借契約を行なった。そして、三ヶ年間に三万一千五十本の植樹がなされたのである。

養鶏部は、矢倉前に加納子爵より寄贈の最新式米国製孵卵器を備え、主任高原平吉、片岡儀作等が白色ミノルカ、横班ブリマウスロック、雪白レグホーン等の孵化改良種の普及につとめた。また家畜のうち豚は、農商務省所管北海道月寒種畜場渋谷分場より払下げを受けた。そして血統純正な種豚による繁殖研究が続けられ、全国品評会に於ては、金メダルを獲得したことがある。兎は繁殖力の強い、食用種の仏国産の餌育を奨励した。

兵事訓練部は、主任原田善吉の指導のもとに村田銃による訓練がなされ、また柔道部では日本体育会仙名三段の指導を受けるほか、剣道部、その他いずれもきびしい精進をつづけた。簿記部、演説部、

夜学部、自助会は将来建設される信用組合の経営準備のために習練を重ね、加納会長自ら指導の任に当たり、各区に幻灯会を催して巡回指導を行なった。商業部は毎夏、海岸に一小店を開き、別荘または滞在客の便宜をはかり、自作の野菜、果物、白米、鶏卵、肉類その他台所用品、海水用具にいたるまで廉価で販売した。町内では現在の角八菓子店の裏に宮本万之助宅があつて、青年会と称し、園芸部の販売所をかねていた。現在の宮本青果店を青年会と呼ぶのは、当町の名称をそのまま襲名したものである。なお、養魚部は町内字綱目の溜池四町歩を借り、四十一年には鯉子八千尾を、四十二年には同種六千尾を放養した。さらに一宮川で蜆貝の飼育を行ない、宮内庁に献上して所謂献上蜆の名を得た。また年一回一宮町青年物産品評会をひらき、農業の発達を促進するために大いにつくした。雑誌「一宮青年」を発行し、五十七号より柏葉会と共同の機関雑誌として号を重ねた。

このように諸活動が活発円滑に実践されたのも、予算面で会費五銭の外、百名に近い賛助員の月十銭の会費、特別寄付、五百円の町補助金、道路修築等を一任された青年会の労力奉仕による収益等、かなりの裏付けがあつたからである。加納会長が郷土を去つてからも、二代宮重謙輔、三代山田精吾と引続き会の目的遂行のため尽力された。昭和六年九代会長丸嶋市蔵氏、副会長小安一のと、大がけの溜池工事を一万円で請負い、日当六十銭で一日百人平均動員した。十代中村五郎会長のとき、名を青年団と改め団服を制定、市街地、山間、平担の三分団に分け、各分団長のもとで地域的な活動を

高橋信二、森田喜八等が活躍した。時には八幡講の力士や、国技館の式守伊之助氏を介して十両級の力士を招き奉納相撲を行なった。青年団自らが浅草から芸人呼んで、春祭りを賑やかにしたこともあつた。五月十三日の玉前神社所領の御田植祭も青年団の手で行行、十二月十四日、四十七士の義士討入りを記念し、義士会と称して夕刻より参集、諸行事の打合せ、意見の交換等に夜を徹して行なつたこともある。そして、自治活動は益々活発なものとなつて行つたが、満洲事變につづいて日華事變と世相は急変し、若人たちの召集も相次ぎ、遂に日本は太平洋戦争に突入してしまつたのである。折から昭和十六年春、十三代団長加藤徳次も出征され、まさに世は国を挙げての戦時体制に移つていった。

終戦後、わが一宮町には逸早く文化活動が起こり、伊藤四郎の主宰する民主主義科学連盟、或いは中村千代松主宰の白鷹会、または秦彦文主宰の暁生会等の文化団体が誕生した。

昭和二十六年一宮青年クラブ誕生、郡県連合青年団に加入、会長片岡晃、副会長齊藤謙一、高原栄子、総務部長八木常明、文化部長大矢正行、体育部長川野一雄、連絡長中村泰、副連絡長加藤隆、家政部長吉野たか等の他各部理事若千名の役員で構成、会員男子六十四名、女子四十三名計百七名で組織されたのである。一区より七区までが主体となり、山手、海岸、平担部は農協の四月クラブ加入者が多いため一部有志が加入した。

会費は毎月三十円で、歴代会長は次のとおりである。

一宮青年会歴代会長

開始した。平担部、山間部は、米穀、蔬菜、果樹の増産研究のため、市街地は観光事業に資するため夫々視察旅行を盛んに行なつた。昭和十一年二月二十六日、当時の会長中村莊二以下数名にて視察旅行の折り、たまたま湯河原に一泊したときのことである。二・二六事件が勃発し、牧野内務大臣邸焼拂事件に遭遇した。なお海水浴客誘致宣伝のために商工会の作成したパンフレット、ピラ等を持参、七月上旬に上京して青山青年会館に宿泊し、地元一宮町有志の紹介状をもとに有名人の家庭を訪問、勧誘宣伝に努める一方、要所の街頭宣伝、東京駅、五反田駅をはじめとして主要駅のピラ張り等を行ない、一宮青年団と染めぬいた襷も鮮かに都民の眼を引いた。これ等郷土愛に燃えた青年団員たちが、現在の商工会の担い手となつていのである。勧誘宣伝で来宮した避暑客の便宜を図るためには、貸家組合との連絡交渉まで行なつた。その他団員の体位向上のために水陸運動を奨励し、長生郡青年団の優勝旗争奪対抗試合には見事優勝旗、カップを獲得すること数回に及び、特に秋山孝祐、渡辺金次、山口勇、渋谷正二、渡辺武司、加藤徳司等の活躍は運動部の華であつた。また弁論大会では、山間部の小高倉之助、久我精一郎、齊藤精司等が大いに気を吐いた。その他、年中行事として彼岸の中日には、早朝四時より旧藩主加納久宜公墓所に参集、清掃を行ない、花を手向け、遺徳を偲んだ後、各自持寄り材料で豚汁会を催した。上原元師、後藤文夫氏等有名人の来駕を得、追悼記念講演会をひらき、意義ある一日を過ごしたこともある。四月十三日の玉前神社祭礼には部下の青年団対抗相撲を行ない、渡辺正夫、小塚春吉、

一代	加納 久助	二代	宮重 謙輔
三代	山田 精吾	四代	石橋嘉平次
五代	齊藤 修一	六代	田中 周
七代	御園生善栄	八代	富塚 市郎
九代	丸嶋 市蔵		
名称青年団と改める			
十代	中村五郎市	十一代	中村 莊二
十二代	関 忠四郎	十三代	加藤 徳次
未亡人会	一宮町未亡人会は、未亡人の相互扶助慰藉救済を目的として設立された。		

戦後全国各地に結成の機運が盛り上り、郡内各町村においても、次々と組織された。

昭和二十七年九月十七日、長生郡連合未亡人会が組織されるにあたり、当町においては婦人会長齊藤信氏が積極的に町福祉課に働きかけ、久野福祉係、阿沢太兵衛、婦人会の三者が一体となり、結成準備に取りかかったのである。同年九月十日初代会長津村廉、副会長志村八千代を決め、会員八十余名によって発足した。

郡会長には山田みつがあたり、連合会を通じて会員の親睦向上をはかった。地元未亡人会も、福祉の特殊団体として会の目的達成のために励んだ。三十円の会費を補うため、映画会の開催、夏季見晴台での麦湯のサービス、キャンペー、パンの販売等を行なった。

昭和三十年四月、会長志村八千代、副会長高原タケが会の運営を引継ぎ、母の日のカーネーションを作り、農繁期における託児所の

手伝いに会員を派遣、物品販売を通じて資金調達の道を講じた。

昭和三十三年四月、会長山形好子、副会長永田任子のときも、母の日のカーネーション作り、季節託児所の手伝い、県母子会館基金獲得のための映画「蟻の街のマリヤ」の上映、そして物品販売等も行なって割当額二万一千円を完納した。三十四年七月には、一宮河口に茶店を開き、「かっぱ」と命名、会員交互に出勤して好成績を収めた。同年十月十二日、会員慰安旅行を実施し、三十五年八月には郡母子会家庭児童キャンプを一宮海岸に催した。

昭和三十六年会長永田任子、副会長丸嶋美佐保は、前期目標の諸活動を通じ、会運営に努力したが、河口の茶店は人手不足のため昭和三十七年より廃止した。それに代って会では毎月簡易生命保険の集金を行なうことになり、一ヵ月一千二百円の収入をみるにいった。更に三十八年よりは、物品販売にかわり、会費値上げが会員より要求され百円になった。

このように未亡人会は、自ら経済的基盤の上に立って向上に努める一方、共に手を携え、励し合いながら明朗な希望の多い毎日を送っている。

東浪見地区婦人会

国防婦人会

大日本国防婦人会の起縁は、寺内陸軍大臣が第四



東浪見地区婦人会

師団長の時、満洲事変に刺激されて報国の念に燃え、昭和七年十二月十三日に設立せしめた。本会の特色は、国防の本源が家庭より発するという主旨のもとに、各自が婦人としての護国の責務を自覚すること、その誇りを持つところにあった。

本会の制服(白エプロン)は、「国防は台所から」の標語を如実にあらわしたもので、服装の競争、虚栄に流れることなく、質素の美德を涵養する意味合いを持っていた。そして、全国各地に結成され、東浪見においても、軍司令部査閲官南部閣下より強く勧められ、昭和十年七月八日に結成された。

発起人は秋場てい、田中りやうの兩名で、村長(横山助左衛門氏)、小学校長(清水孝平氏)、在郷軍人(宗政清治氏)その他のものが結成に協力した。

会の構成は、会長秋場てい、田中りやう、部落役員(区長夫人)、会員三〇〇名(一家庭より一名)であった。

活動状況 戦時下の会の記録は、終戦時焼却したので、その活動状況をここに簡単に記しておくことにする。

満洲事変より日華事変、太平洋戦争と戦火は益々熾烈を極め、婦人会は、生活をもって戦う総力戦軍隊といわれ、決戦生活の実践指導にあたった。

出征兵士の送迎、戦線兵士への慰問袋作り、戦没者家族の見舞、食糧増産、兵器増産への貯蓄推進等にはげんだ。この一環として、共同炊事の手伝いがあり、川村秀文知事夫人の一行が、モンペ姿で激励視察に來られた。農繁期には託児所を開設したが、特に照満寺住

職小安良仙は、協力を惜しまなかった。

昭和十二年十二月十五日、婦人会主催にて七ツ子共同祝いを行なった。これは出征家族の家庭から、家では兵隊に出ているので七ツ子の祝いもできない、という訴えのあったのをとりあげたものである。当初は七人の希望者により八坂神社で挙行了した。七ツ子共同祝いの元祖といっても過言ではない。

昭和十七年三月二十四日、大日本国防婦人会が解散し、同年四月より大日本婦人会が発足した。会員の服装も、白エプロン、国防襟をとりはずし、紺の会服に変わった。第一回通常総会は皇后陛下、東久邇総裁宮殿下、各名譽会員宮殿下御臨席のもとに行なわれた。會長秋場ていがこれに出席した。指導運営の大綱は、「総躍起申合せ事項」の徹底化で、前線将士と等しき覚悟をもち、全会員の総力を結集して必勝の戦力を増強し、婦人報国の実をあげること、特に戦局の急迫に即応するよう、次の項目を実行することであった。

一、航空戦力並に海運力の急速にして飛躍的な増強。二、食糧の増産と消費の節約。三、空襲必至を覚悟して万全の準備。

東浪見でさっそく行なったのは、闇行商を廃し、増産の躍起運動を起こしたことである。行商の多い東浪見では、食糧の割当完納が困難であった。そこで増産をはかるために、行商全廃運動を起こして成果をあげた。

砂鉄採取の勤勞奉仕も、特に炎天下で前線將兵を偲びながら行なった。以割当にたいしては、全会員の努力で完納した。昭和十八年本部表彰の栄を獲得、昭和十九年二月十六日県支部総会において伝

達を受けた。

婦人会の経費としては、当初寄付金を募ったが、僅少であり、事業費は主に奉仕作業によって得ることとした。増産、貯蓄、会費補充の揃う条件は、聖地軍茶利山裏山の開拓であった。三百余人の会員が竹箬を起こし、村中に斧の音を響かせ、整地して供出、慰問、貯蓄の収入源としたのである。そして軍茶利山植林奉仕も行なった。終戦の直前、敵の空襲が激しくなって大きな団体行動が困難となり、小数の幹部で「義勇隊婦人部」を結成したが、敗戦とともに消滅した。大日本婦人会も、愛国婦人会も、敗戦により昭和二十年八月十六日解散した。

あづま会の誕生 ボツダム宣言受諾後、昭和二十年九月、マッカーサー司令部より選挙権賦与による日本婦人の解放が指令され、続いて選挙法の改正により、婦人は選挙権と被選挙権を男子と同様に与えられた。新憲法により無差別、平等の法制上の地位を得たことは、長年封建的な地位と生活を続けて来た婦人には、画期的な変革であった。この選挙権を与えられたことにより、これを公正に行使することが目標となり婦人教育の端を発した。

婦人の解放と地位の向上をめざし、各地域で自主的に組織結成の機運が盛り上がって来た。東浪見地区では、秋場前会長が県の幹部の一人であったので、逸早く会の結成指導にあたり、自主的な話し合いによって昭和二十一年三月七日あづま会を誕生せしめた。

このあづま会の名称は、当時遍照寺に疎開されていた詩人、白鳥省吾先生の名付けによるもので、婦人らしい優しさをもたせ、あづま

軍政部より召喚をうけて解体を申し渡された。やむなく千葉婦人会と改称し、ホイットマン女史の転任を機会に千葉県婦人会を結成して昭和二十三年十一月二十五日発会式を挙げた。現在の千葉県連合婦人会はこれより始まった。本県で最初に結成を見たのが千葉市内の一部千葉文化会で、次いで茂原、木更津、東浪見、佐原、東金、八日市場がある。みな自主的に発足したものの、混乱の最中に民主団体の育成は容易でなかった。山田みつ先生の講演を聞き、次の時代を背負う子供の教育に目を開いていった。

昭和二十三年十二月、赤十字奉仕団結成。昭和二十四年一月十五日婦人会主催により第一回成人式を東浪見小学校で挙行。記念樹、梅の苗木を贈呈。

長生郡連合婦人会結成 昭和二十四年五月十四日、茂原町新旭館において挙行。初代会長、小川一、副会長、秋場てい、古山たけ。県、郡の結成で発展の途にいたった婦人会も、昭和二十四年六月社会教育法が制定され、文部省や、県社会教育課から漸く社教団体として認められるにいたったが、全般的には、まだ未熟なものであった。

新生活運動 戦後の鉄道乗客は道徳に欠け、車内の乱雑振りは目を覆うばかりであった。秋場会長を陣頭に、行商の婦人達と必死に房総東線の車内浄化運動を行なった。各駅毎に屑箱を設置し、パンフレットを配布し、駅頭に立看板を立て、車内放送で協力を呼びかけ、千葉管理部より感謝された上、会長は陸上輸送協会地区委員を委嘱された。

昭和二十七年四月二十八日、平和条約が発効、これを契機にあら

(東) 会と仮名で称した。

会長秋場てい、副会長田中りょう、部落役員二十名、書記会計仲野孝。

活動状況 戦没者慰霊祭の執行、戦没者遺児の要保護者子弟への文房具贈与、女子青年団、母の会結成の斡旋、婦人の教養を昂めるための講演会、映画の暗幕を作り視聴覚教育の普及、料理講習等。

千葉県連合婦人会の結成 敗戦後の混乱時のある日、千葉軍政部より呼び出しがあった。愛国、国防、大日本婦人会に関係していた婦人二十数名が県内から集まり、軍政部のリンダパーク氏などから、民主主義のあり方、婦人会の運営法等を図解で教えられ、婦人会はあく自主的でなければならぬ。市町村吏員の世話にもならず、一切自分達でせよ、と指導された。その後ホイットマン女史が婦人指導担当者として来県され、同女史の指導をうけた。この時連合婦人会の組織をもちたいと申しでたところ、ホ女史曰く、千葉県婦人には立派な人もいるがレベルの低い婦人もいる、一本のクサリも其中の一個悪いのがあれば使えない、先ず個人の民主的改造が先決で、連合婦人会を組織する資格がない、というのである。すると一人の婦人が、一本の弱い綱も抱き込んでなせば強い綱になる、と反論したが、占領下にあること故涙をのんで引きさがった。千葉の沼田、木更津の山崎、佐原の高木、八日市場の鶯塚、茂原の小川、東浪見の秋場、市原の桑田、この七人で親和会をつくり、日赤事務所を会場にして婦人会結成のために努力した。そして昭和二十二年十一月、五十二団体一万五千名で連合婦人会を結成した。ところが、

ゆる面で、終戦後の諸政策についての再検討が始まった。戦後著しく生活の変化をもたらした婦人会に対し、いち早く批判が向けられた。団体の育成に重点を置き、行事を中心とした従来の婦人会の歩みに反省がなされるようになった。いわゆる役員会の会にならぬよう、この問題の解決方法として指導者の養成、組織の合理化、任務の分担制を県連婦は奨励した。

昭和三十年鳩山内閣によって新生活運動が提唱され、冠婚葬祭の合理化、住みよい社会の建設、ハエ蚊の撲滅運動、貯蓄、親切運動が展開された。

ベテスタホーム開墾奉仕 財団法人身体障害者寮として八積に在り、創設時には幾度となく欠、鎌をかついで奉仕作業に出た。それ以来行事の一環として現地慰問を続行している。

昭和三十一年田中会長就任。指導者の養成期に入り、グループ学習が芽生え、生活改善クラブができた。レクリエーションを取り入れるようになり、町民大会に初出場した。小学校の運動会にも参加し、高令者の接待に協力した。

農協婦人部結成 昭和三十三年三月、婦人会員は概ね農業に従事しているので、婦人会則によって農協婦人部を結成した。団体活動の正しいあり方の検討、会の基本的財源の研究、会費についての話し合いなどをし、会議の進め方の勉強指導を行なった。なお、婦人学級開設への方向づけとして、会則の全面的修正、会費の増額、婦人学級先進地区資料による学習と心構えの普及につとめた。

昭和三十二年、白井きくが会長に就任した。役員は年令層が非常

に若くなり、かつ社会情勢も安定して生活にゆとりが生じ、会員が進歩的になってきた。多くの団体組織の消えた戦後、婦人会は社教団体として行政に協力するようになり、必然的に会務は多忙を極めた。

中央機関に理事がおかれた。指導者養成及び会務の円滑化を目的として、種々の改善がなされた。

婦人学級の開設 この開設は、三十二年度の重点的目標であり、地区婦人会の運営方針は、概ね県のスローガンによって貫かれていた。一、教養を高めて実力をつける。二、青少年の環境浄化。三、政治意識の昂揚、このために地域の環境にそくした計画を立てるのであるが、末端まで理解して自主的な実践をするには、話合いの場として婦人学級の必要が痛感された。そこですぐさまアンケートによる賛否の調査を行なった。この結果、七十五%の賛成をもって開設に踏み切ったのである。

昭和三十三年八月六日、婦人学級開講記念祭を挙行。この日は婦人開放の日とし、文化向上を記念する日として、後々まで婦人祭りと称してこれを行なうことになった。

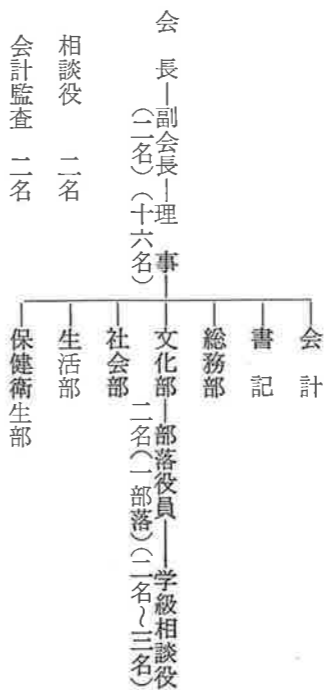
以来婦人会の活動は、中央活動より婦人学級による活動のほうに盛んになり、したがって、婦人学級に関連した会の活動が多くなった。その活動状況は、以下のとおりである。

日赤募金、福祉施設慰問(長生共楽園)、敬老会(中央及部落毎に催す)、裁判所傍聴見学、会服の統一、健康診断協力、家計簿普及、検便、福祉施設の寄付及び販売協力、町民大会参加(一宮地区、東

浪見地区初の合同踊りを行なった)七ツ子合同祝等。

三十三年以後 婦人会の指導目標と計画的事業は、大体前年にならってあまり変わっていない。同じように会の組織の充実化と、婦人の地位の向上をめざして活動した。婦人学級の育成、講習会の開催、先進地区の見学、そして知識を広くとめ、視聴覚教育を多く取入れて学習を行なった。

会の発展は、組織の強化により、従来の惰性的にして依頼性の強い慣習から脱することにあるとした。当時から現在にいたる組織は次のとおりである。



積極的な活動として、町議会傍聴、地区新生活工夫展開催、組合マーク愛用運動、志田順子嬢第三回アジア大会出場応援参加、未亡人会館建設資金調達協力、保護司主催見学参加、就労青年慰問文発送、災害見舞義捐金募集、投票立合、一宮学園慰問等を挙げることができる。

昭和三十三年三月、婦人会則により厚生保護婦人会を結成した。組織の強化と活発な学習による実践化の資料呈示発表の機会が多

くなり、テレビ、ラジオの放送資料の提供も数多くなった。

東浪見地区は、保健福祉組織活動推進地区となり、環境衛生指定地区が多く、婦人会が中心となって新生活運動、ハエ、蚊の退治、集会所改善等に成果をあげた。体験発表も各所で行なった。これらの成果により、全国新生活推進運動推奨地区として全国表彰、千葉県知事表彰、茂原保健所感謝状等を受けた。

また、市町村の合併により、婦人会も行政との関連上、連合体組織をもち、中央での指導者養成の学級がすでに展開されており、一宮町としてはまだ合併の気運もなく、地区活動のみ行なっていたが、昭和三十六年に県連婦指定中央婦人学級がおこされた。従来講習会、総会、町民大会などで相互親睦をはかっておりながらも、両地区合同学習はこれが最初であった。

昭和三十六年十月六日、開講式、学習回数四、学級生五〇名。学習内容は過去の婦人学級の反省、教材教具を使つてのグループ学習、講師をかこんでよい子を育てる学習、政治学習等であった。

昭和三十七年三月、志田会長が就任した。正しい団体としての運営は軌道にのり、会長は理事の中から選任された。青年研修所の落成によって公民館利用の学習に入る。昭和三十七年度文部省委嘱婦人学級の指定を受け、中央学級に重点をおく。学習方法としてアンケートにより学習目標を定めた。

学習内容は、子供をめぐる社会問題、母と子の話し合い、子供の年齢別グループ研究、夫を対象とする子供のしつけにたいするアンケートによる男性の考え方、男性代表者との話し合い。干潟町婦人

会との交換学級、毎日新聞社論説員伊藤昇の指導講演、長生郡婦人会に公開学習等であった。

一宮町議会議員に初めて婦人が進出した。婦人に選挙権が与えられてより十数年、婦人の自覚もたかまり、ついに婦人代表を町議会におくることができた。この結果、正しい選挙のありかたについても、一般婦人のよく認識するところとなった。

昭和三十三年十一月一日、県下唯一の最優秀婦人団体として表彰を受けた。

三十八年六月二十六日、釣部落婦人学級の希望により、糞尿処置問題について議会議長あてに請願書を提出し、議会の傍聴を行なった。

三十八年八月、この地区に昔からつたわっている「東浪見甚句」「ぼんだ歌」が県無形文化財指定候補としてとりあげられ、県芸術大会に出場した。郷土芸能保存育成の観点から、盆踊大会を催し、これを普及することにした。

三十八年五月三十日、秋場ていは日赤奉仕団の表彰を受けた。

三十八年は選挙の多い年で、選挙管理委員会との協議会などをよくする運動、映写機、電化機具の使用法講習、子供会、合同敬老会、ライブラリーの設置、青年との話しあい、料理講習、生花、茶の湯の勉強等を計画し、社教委嘱中央婦人学級をもって学習を行なっている。

歴代の会長、副会長